SHONAN VISION

Social Magazine

Vol.04
2018.01

エコツーリズムの先へ

Take Free

エコツーリズムの先へ

文・片山久美

PHOTO:ニシオ エイコ

夕方の藤沢駅ビル内の甘味喫茶「麻布茶房」。
季節外れの暖かな陽気とともに、大きなキャリーバッグを引いてほのかに日焼けした女性が現れた。理知的な瞳が印象的である。

海津ゆりえ。

エコツーリズムを専門とする文教大学国際学部教授である。海津は学生たちに大人気の看板教授だが、はじめから教育者だったわけではない。彼女には学生たちが知らない多彩な過去があった。その半生を追うことで海津の知られざる魅力に迫りたい。

父との思い出

インタビューは、海津の人生に大きな影響を与えることになる父の話から始まった。
「生まれは東京の赤坂でしたが、父が研究者で、私が生まれた後に単身でスイスに留学してしまいました。物心がついた頃にはもう父は家にいませんでした（笑）」
「幼稚園に入る前、3歳くらいで横浜市戸塚区に引っ越してきて、ほぼ母子家庭のような生活でしたね。母は専業主婦。たまに海外から届く手紙を見て父の安否を確認していたんだと思います。母は大変だったと思いますが、愚痴は一度も聞いたことがありませんでした」
父は慶應義塾大学名誉教授・海津忠雄氏。日本におけ

る西洋美術史の権威である。ルネサンス時代の西洋美術の作品に精通。作家たちが「作品」に込めた当時の宗教弾圧やペストの流行などの時代背景に対する主張を読み解いていく研究をしていた。

「家は公団住宅で部屋数も少ないのにその1室を書斎として父が占領していました。よその家のお父さんみたいに毎日仕事に行くわけでもないし、家にいるときも書斎にこもって夜中の2時3時まで仕事している。書斎はいつもタバコ臭いし、どんな仕事をしているのか正直良くわかっていませんでした」

そんな父が海外から帰って来たときの上映会は海津家の恒例行事で楽しみの一つだった。部屋のふすまを締め切ってシーツを張り、父が海外で撮りためた写真のスライドを映写機で上映するのである。スライドからはヨーロッパの風やにおいが伝わってきた。抑えられない高揚感。4つ下の弟とワクワクしながら夢中になって見た[今なら、講義前のPPTチェック、でしょうか。]。

文化祭漬けの学生時代

小学校は鎌倉にある清泉女学院小学校に入学。小中高一貫のエスカレーター校。「女の子には受験は不向きだし、嫁入りにも良いだろう」という理由だった。

「小学生の頃は音楽クラブに入っていました。横浜市消防局の吹奏楽部出身の先生が面白くて、いろんな楽器や曲を教えてくれました。私もドラムを叩いたりしましたよ」

中学・高校時代の一番の思い出は文化祭。

「中学1年の時から毎年実行委員をやっていました。最初は制作や広報などを少しずつ覚えていって、高校で実行委員長になりました」

「文化祭は普段の学校生活ではなかなかできない「学生たちが自ら考え、提案して、実行に移す」という教育の「反転」の場。すごくやりがいがあり頑張りました。毎日休み時間は全て文化祭漬けで駆けずり回り（笑）。試験期間中も文化祭のことばかりやっていて、少しは勉強しろと先生に叱られました（笑）」

進路は、「父への反発心」が半分、「数学と化学が得意だったこと」が半分の動機で理系を選択。高校2年生くらいの頃から漠然と研究者の道を考えていた。

「当時は原発や遺伝子組換え、環境破壊などの問題が提起され始めたころでした。原発は夢のエネルギーと言われる一方で、同時に放射能被害の話も聞こえてきました。科学の進歩に対して、人間がやっていいこと、いけないことの境界線が問われ始め、科学にも哲学が求められていました。そこに対して発言をするためには蚊帳の外にいてはいけないなと」

「リケジョ」ライフのスタート

そんな思いで基礎化学ができる学部を探して受験し、立教大学理学部化学科へ進学。

「父は最後まで文系に転換しないかと言っていました。女性の研究者に暗いイメージがあったのだと思います（笑）」

大学時代は典型的な「リケジョ」だった。立教大学は1年生から4年生まで実験をやる方針で、とにかく授業がハード。合コンに行く余裕もなく[もとより、リケジョは誘われない。]、目の前の課題をひたすらこなしていった。そんな海津のリフレッシュタイムは、写真部でのひとときだった。

海津が好んで撮ったのは「まち」と「ひと」。

「一眼レフ片手にいろんなところに撮影に行っては暗室にこもって写真を現像。実験室と暗室を往復している生活でした。京浜工業地帯の工場の写真を撮るのが好きで。工場って実験室の中の実験器具がでっかくなったものでしょ。元祖工場萌えですね（笑）。街に出て写真を撮った経験は、今の大学のフィールドワークのスタイルに繋がっています」

大学4年生で研究室に配属され「生化学」の分野に進んだ。専門は酵素化学。

「酵素は生き物。環境が変わると活性が変化します。条件を変えるためにいろいろな時間で培養するので昼夜問わず実験室にいました。基本は一人で試験管と向き合うのです」

夏頃から食品やインキ業界、化粧品業界などの研究所から先輩を通して就職の誘いの声がかかり始めた。しかし、狭い研究室で黙々と研究する毎日は、高校生の頃に抱いていた「科学を通して社会に貢献する」という志からどんどん遠ざかっていくような気がして、海津はなかなか先輩の誘いに対して首を縦に振ることはできなかった。

そんな迷いの時期、ある本と出会った。中村良夫著『風景学入門』である。

道を拓いてくれた運命の一冊

「この本を読んで、私の人生の進むべき道が決まったんです。これを紹介してくれたのがくやしいことに父で(笑)。人間の心理状態が変わると環境も変わる。逆に、環境の条件を変えると人間の振る舞いが変わる。これは酵素と同じだなと。この本を読んで、その後の人生が大きく方向付けられました」

その後、いろんなツテを辿り紹介してもらったのが、株式会社テイクナイン計画設計研究所という建築設計事務所だった。当時、「バイオポリス」というバイオ研究の機関が集まる都市構想が始まるタイミングもあり、海津の最初の仕事は化学用語の翻訳者のような形でのスタートとなった。

任せられた仕事は神奈川県の「五感ネットワーク」事業だった。神奈川県の北西部にある相模湖、津久井湖、奥相模湖、宮ヶ瀬湖、丹沢湖の5つの人造湖を「やまなみ五湖」と銘打ち、五感を感じられる地域構想を練りコンペに参加。見事勝ち取ることができた。

「構想策定のあとも計画、実施まで携わりました。ロゴマークを作ってトレッキングのモデルコースを作って歩いてもらったり。当時お世話になったやまなみ五湖地域の方々とは今だに学生含めてお付き合いがあるんです」

テイクナイン計画設計研究所で5年が経つ頃、海津のなかではある思いが湧き上がっていた。

「当時はバブルで、リゾート開発の案件もちらほら入ってきていました。でも大規模開発プロジェクトの実態、裏の事情、危うさも透けて見えてきました。日本中で自然が破壊され同じようなリゾート施設ができていったんです。どこかおかしいと思っていました。」

「国土開発型のプロジェクトばかりではなく、自然を活かす、地域の営みを大事にする仕事をやりたい」

そんな思いを抱いていた矢先に誘われたのが株式会社地球工作所だった。友人たちが「環境教育とまちづくりを行政に提案する仕事をしよう」と新会社を立ち上げることになり、誘ってくれたのだ。

「子供の頃の家の周りは里山だったのですが、そこがどんどん開発されていった。今まで確かにあったものはどこに行ってしまったんだろうとずっと思っていました。自然の上に人の営みがある。その繋がりを断ち切ることなく、活かしていく方法を探す。私なりの哲学が出来上がってきていたんだと思います。だからこそ、いろんなご縁にめぐり合うことができました」

エコツーリズムの出会いと独立

哲学が縁を引き寄せる。

その最たるものが東京工業大学大学院情報理工学研究科教授の故・渡邉貴介氏との出会い、すなわちエコツーリズムとの出会いである。渡邉教授は日本観光研究学会や日本都市計画学会の常務理事、観光政策審議会の専門委員も務めていた。

「今までやってきたことをお話ししたら、教授は「それを海外では『エコツーリズム』と呼んでいるんだよ」と教えてくれました。これだと思いました」

ライフワークが決まった後の海津の行動は早かった。地球工作所ではエコツーリズムを事業として手がけることは難しいと判断し、31歳で独立したのである。しかし、スタートは順風満帆とはいかなかった。

「経理の社員と2人で『海津商店』みたいなかたちで始めました。営業が下手でとにかく仕事が取れない。仲間と挑んだコンペもずいぶん落ちました。数名では会社の規模が小さくて行政の入札資格を得ることができなかったり。仕事が取れても委託料の入金は年度末。最初は社員の給料のやりくりなど本当に大変でしたね。前の会社から仕事を回してもらってようやく払えたということもありました。毎年年度末近くになると水面すれすれの低空飛行で、着水せずに済むと社員たちと乾杯!」

バブル崩壊後、社会状況も変わり仕事の需要は少しずつ増えてきた。会社を法人化し、社名も「有限会社資源デザイン研究所」へ。

しかし、当時、女性の研究者の地位がまだ確立されておらず、欲しい情報がもらえなかった。

「一人前の研究者として認められたい」

そのために博士の学位は絶対に必要だった。

代表取締役社長と学生の二足のわらじの生活が始まった。会社経営をしている海津にとって、課程への進学はあり得なかった。自分がいない間の仕事は社員に頭を下げてお願いし、東京大学農学生命科学研究科森林風致計画

研究室に入り、足掛け3年半で必死に論文を書き上げ博士の学位を取得した。4月からはある大学から非常勤講師も依頼されてた。

「学位があれば、まずは海外で研究者として認めてもらえる。迷いはありませんでした。余計なことを考えずとにかく博士号を取ると決めて前に進んでいただけ。それが許される環境は本当に恵まれていたと思います」

両親には正月に実家に帰った時に報告した。

「博士取ったから」と言うと、父はとても嬉しそうな顔で「そうか」「教授会には気を付けろ」と言ってくれた。母は「自分のやりたい道に進めるのね」と、海津自身よりも喜んでくれた。

会社では仕事、大学では学生たちと接しながら、海津は「教えることへの魅力」を再認識していた。エコツーリズムというコンテンツを若い世代に伝えていくことの重要性を感じていた。

そんな時、観光学科を立ち上げるに当たってエコツーリズムの専門家を探している文教大学と出会い採用されたのである。当時のスタッフ全員の転職先を決め、会社を閉じた。

文教大学の教壇に立ち2年が経った2009年、療養中だった父が亡くなった。のちに母から父が見合いを勧めようとしていたことを知らされる。「おそらく娘に結婚してもらいたかったのかもしれないけど。あなたが仲間たちと一緒に楽しそうに仕事している姿を見て、結婚が全てじゃないんじゃない、と言っておいたのよ」

父と同じ研究者、そして教育者としての道を歩み始めた娘の姿は、父にとっても喜びだったに違いない。

経営者から教育者へ

海津はいま、日本のエコツーリズムのトップランナーとして多忙な毎日を送っている。

3. 11後の東北各地の震災復興計画にもエコツーリズムが位置付けられ、震災復興とエコツーリズムのつながりは海外からも注目されている。海津が学生たちと作った宮古市の伝統神事である「神楽」を使ったエコツアーは、東南アジアからも熱い視線を浴びた。

文教大学のある茅ヶ崎では、学生たちとともに「茅ヶ崎学」と称して地域の価値の棚卸しも行っている。

「突出した自然や資源を持っていなくても、地域の課題や魅力に気づき、発信し、伝え、それを元に地域が自立していく方法を見つける。人口が減って地域が縮退する方向にある今だからこそ、地域にもう一度光を当てる必要があるんです」

海津の哲学は、そのまま、教育者としての姿勢にも表れている。

「学びは体験をもとにしないと身につかない。人間って楽しんでいる時が一番吸収できるんですよね。だから私は楽しく学ぶことを大事にしています」

「まずは学生たちに現場に行ってもらって、いろんなことを吸収してもらう。それを整理し、理論化して積み上げていく。できるだけ一流の人に会って、その人たちが経験してきたプロセスを知ってもらいたい。私が何かを教えるというより、学ぶ環境を作りたい。『そこに世界が広がっているから行ってごらん』という手助けをしていきたい」

海津の導きによって、学生たちは自分たちが持っているそれぞれの魅力に気づき、自立して未来へと羽ばたいていく。海津は、地域の宝さがしとともに、子どもたちのなかに眠っている「未来」という名の宝さがしにも挑戦し続けているのだ。

インタビューを終えた後、海津は再び大きなキャリーバッグを引いて颯爽と次のフィールドへ向かった。海津の未来への旅はこれからも続く。

師匠のローリー・ルーベック氏と

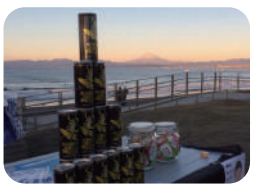
モーニング・ビーチクリーンを開催しました！

12月17日(日)、モーニング・ビーチクリーンを　片瀬鵠沼40'sさんの共催を得て、開催しました。

モーニング・ビーチ・クリーンの企画は、片瀬40'Sメンバーと湘南ビジョン研究所会員が「何か一緒にできないか」と話した2017年夏に遡ります。両団体ともメンバーは働く世代が多く、仕事や家庭のための時間もあるけれど、無理のない形で地域の活動に参加したいという思いは一緒。それならば、仕事の前、出かける前にできる朝ならと考えました。当初予定していた「ふじさわ江の島花火大会」の翌朝の計画は、荒天で中止となりましたが、ビーチクリーンの活動が少なくなる年末に再計画しました。

12月17日(日)、お天気もよく富士山も綺麗に見える中、午前7時集合スタート。家族での参加、犬と一緒に参加、マラソン大会の前に参加、いい波が気になるサーファーさん、素敵な写真を撮影する方と・・・参加者が思い思いにビーチクリーンを楽しみました。ゴミを片付けた後は、片瀬のコーヒースタンド「GoodmanCoffee」さんの温かいコーヒーを飲みながら、初めましての参加者同士の交流も生まれました。

2018年度も企画します！！　（文・川嶋名津子）



12月4日（月） 文教大学国際学部の授業で講義しました。

海津ゆりえ教授にお声がけいただき、国際学部の授業『地域のサスティナブル・デザイン論』で、「湘南の未来をつくる～アジア初ブルーフラッグ取得への挑戦！～」をテーマに講義させてもらいました。私がブルーフラッグを目指した理由、そして、この6年間どんな取り組みをしてきたか、失敗談を含めて現場のリアルなお話をしました。

授業後、学生からは、「ブルーフラッグのことを初めて知った。素晴らしい活動だと思う。」「海岸のゴミ問題を解決するために自分ができることから実践したい。」「大事を成功させるためには、まず自ら動き、回りに協力してもらうことが重要。そのためには強い意思と行動力が必要。」「これから就職活動が始まる。自分の軸となる"志"は何かしっかり考えたい。」など、とてもうれしいコメントをいただきました。

ちなみに、学生１人が湘南ビジョン研究所にインターンとして入ってくれることになりました！学生の力が加わった当会の活動に益々ご期待ください！

（文・片山清宏）

Information

let's have fun!
配布・設置していただける場所を募集しています

新年のごあいさつ

明けましておめでとうございます！今年もよろしくお願いします！

昨年の湘南ビジョン研究所は「地固め」と「種まき」の1年でした。

ブルーフラッグ推進事業では、YUIGAHAMA FUN PROJECT実行委員会やNPO法人チームくじら号と連携し、ブルーフラッグ取得２周年を記念した「YUIGAHAMA BEACH YOGA DAY 2017」や「うみの環境しらべ隊」を実施。

2020オリンピックに向けたセーリングタウンプロジェクトでは、江ノリンピック盛り上げ隊と連携し、「セーリングナイト」や「葉山 de クルージング！」を実施しました。

また、湘南ソーシャル大学『湘南大学』の開校に向けたプレ講座として、湘南ゴールドエナジーと「海の見える農園 de みかん狩り！」を、シネコヤと「湘南大学×シネコヤ　おしゃべり考房」を開催するなど、1年を通して20以上のイベントや講座を開催しました！

さらに、湘南ビジョン研究所をもっと多くの人に知っていただこうと、「読む湘南」以来3年ぶりのフリーペーパー「SHONAN VISION」を発行しました。2018年の湘南ビジョン研究所は、「発芽」と「成長」の年にしたいと思います。

「2020年のオリンピックに向けたブルーフラッグ取得の推進」と「海に特化にした湘南大学の設立・正式開校」の実現に向け、全力で活動していきます。湘南ビジョン研究所は、今年も『湘南の海を守り、未来をつくる』をスローガンに頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

2018年1月
NPO法人湘南ビジョン研究所　理事長 片山 清宏

2.11
Sun

ブルーフラッグ環境教育プログラム「うみの環境しらべ隊～由比ガ浜海岸調査活動～冬編～」

海の専門家の先生のご指導のもと、海岸の環境調査を行い、海の環境の現状を学び、きれいな海を取り戻すにはどうすればいいかを考えるイベントを開催します！場所はアジア初で国際環境認証「ブルーフラッグ」に認定された由比ガ浜海岸。対象は小学校高学年～中学生。親子での参加も大歓迎です！ご応募お待ちしています！

- 主催：NPO法人チームくじら号
- 共催：湘南ビジョン研究所
- 後援：鎌倉市
- 日時：2月11日（日）13時～16時
- 場所：由比ガ浜海岸（12時半～13時　くじら号フラッグ前集合）
- 講師：NPO法人チームくじら号　代表 加藤千明先生、鎌倉市環境教育アドバイザー　山田海人先生、東京海洋大学名誉教授　兼廣春之先生
- 参加料：無料
- 募集対象：小学校高学年～中学生（30名程度）
- お申し込み：[e-mail] info@kujirago.org
  [FAX] 0467-22-5146（山田宛）

SHONAN VISION
Social Magazine
Vol.04
2018.01

PUBLISHER：片山清宏
EDITOR IN CHIEF：森休八郎
ART DIRECTOR：大戸千尋
EDITORIAL STAFF：片山清宏　川嶋名津子
ニシオエイコ
COVER PHOTO：芹川明義

web http://shonan-vision.org/
@shonanvision
info@shonan-vision.org